stripe

AWS Dev Day 2022 Japan

EventBridgeとAmplify + Stripeで「イベント駆動」なWebサービスを開発する

@hidetaka_dev

Nov 2022

今日のトピック

- AWS AmplifyとStripeを利用して、 SaaSやECのフロントエンド開発をスムーズにできる
- 決済やサブスクリプションなど、 顧客・契約の状態と連動したWFも、Amazon EventBridgeでスムーズに
- AWS AppSync · AWS Step Functionsを活用して、

決済・サブスクに関する運用効率化(**決済OPS**)をはじめよう

岡本 秀高 (@hidetaka_dev)

- Stripe Developer Advocate (ex-developer in Digitalcube)
- JavaScript / TypeScript developer
 - O AWS Lambda / CDK
 - Next.js / React
 - WordPress / Alexa / etc
- AWS Samurai 2017 /
 AWS Community Day APAC 2017
- QiitaでStripeに関するDev blogを**週2/3本**で更新中
 - https://qiita.com/hideoka moto
 - **年間120記事ペ**ース



今日のトピック

- AWS AmplifyとStripeを利用して、 SaaSやECのフロントエンド開発をスムーズにできる
- 決済やサブスクリプションなど、 顧客・契約の状態と連動したWFも、Amazon EventBridgeでスムーズに
- AWS AppSync・AWS Step Functionsを活用して、
 決済・サブスクに関する運用効率化(決済OPS)をはじめよう

SaaSやECなどのサービス開発を、Amplifyで効率化

- サービスのGUI提供に必要な機能が、 AWS Amplifyには揃っている
 - 認証・認可
 - RESTまたはGraphQL API
 - ホスティング・SSL
 - CLIやSDK, UI Component, Figmaなどのツール
 - o etc...
- サービスの「コア機能以外」を、 AWS Amplifyと関連ツールで効率的に実装できる

ビジネスに欠かせない「課金機能」をAPI as a Serviceで

- Stripeなど、決済やサブスクリプションに特化したSaaS
 - PCI DSS準拠
 - サービスの停止率が低い(99.999% uptime for the last 90 days)
- サブスクリプションの契約プランや割引、請求など 「お金に関わる機能要件」の構築・保守コストを、SaaSで抑える
- AWSのAPIを呼び出すように、StripeのAPIをアプリ・システムから利用して課金・請求管理機能を実装

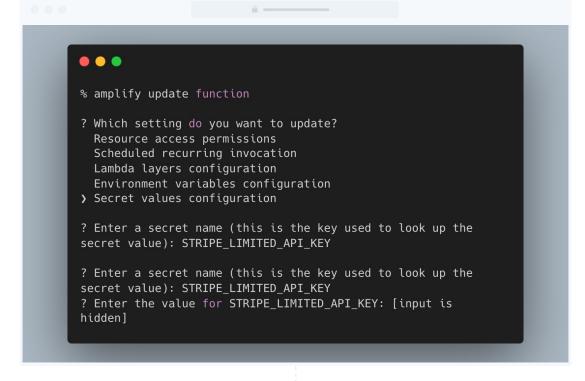
Amplify CLIで、安全にAPIキーを管理

StripeのAPIキー3種

- Publishable API Key
- Secret API Key
- Limited API Key

Secret / Limited API keyは、 Secrets Managerで 安全に管理する

Amplify CLIを利用して、 APIキーの**保管と利用**を 手軽に実現する



Tips: Secretの取得はLambda Layerで

layer:AWS-Parameters-and-Se crets-Lambda-Extensionが登 場 (2022/10)

LayerをLambdaに登録すると、 HTTPリクエストで Secretが取得できる

環境変数で、 キャッシュのTTLや タイムアウトなども設定可能

https://docs.aws.amazon.com/ja_jp/secretsmanager/latest/userguide/retrieving-secrets_lambda.html#retrieving-secrets_lambda_env-var

```
const url = [
  "http://localhost:2773",
  "systemsmanager/parameters/get"
].join('/')
const res = await fetch(
  `${url}?name=${secretName}`,
    headers: {
        "X-Aws-Parameters-Secrets-Token":
                           process.env['AWS SESSION TOKEN']
).then(data => data.json())
```

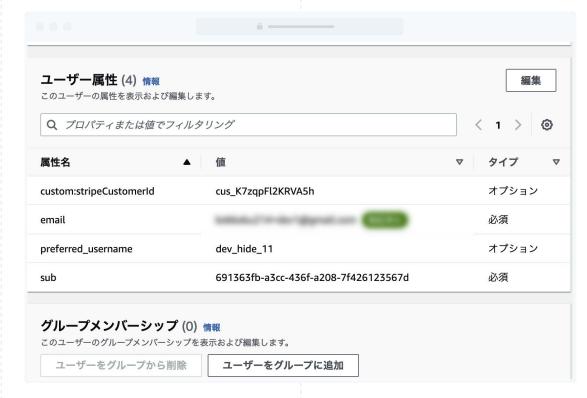
Stripeの顧客情報と、Amplifyのユーザー情報の紐付け

Stripeは、同じメールアドレスで 複数のCustomerデータが作 れる

Stripe Customer IDと Cognito User PoolsのIDを マッピングして重複を回避

手早い方法は、 Metadataでのマッピング

検索性を求める場合、 DynamoDBでテーブルを用意



IDの同期は、Stripe -> CognitoでSyncしよう

Cognitoには、 情報更新時のWebhookがない

StripeのWebhookで、 顧客データ更新を受け付ける

Customer metadataから Cognitoのuser idを取得、 AWS SDKで更新処理

DynamoDBを使う場合は、 DynamoDB StreamでもOK

```
17
     // This is your Stripe CLI webhook secret for testing your endpoint locally.
      const endpointSecret = "whsec c287ea07024c1f49210362efd3e980c770cd18467bf05ad3a9c531
19
20
     app.post('/webhook', express.raw({type: 'application/json'}), (request, response) =>
22
        const sig = request.headers['stripe-signature'];
24
        let event:
25
26
        try {
          event = stripe.webhooks.constructEvent(request.body, sig, endpointSecret);
28
        } catch (err) {
29
          response.status(400).send(`Webhook Error: ${err.message}`);
30
          return:
31
32
33
        // Handle the event
34
        console.log(`Unhandled event type ${event.type}`);
35
36
        // Return a 200 response to acknowledge receipt of the event
37
        response.send();
     });
```

Tips: ユーザーDBを作るか作らないか

- **いずれ必要**になる可能性が高い
 - Metadataでの紐付けでは難しいことへの対応
 - 1ユーザーに、**複数のCustomerやSubscription**を紐づけ
 - 親子アカウントやチームなどの**関係性**ができる場合
 - Stripe APIにアクセスする時間の省略
 - Stripe Webhookで、事前にDBへ必要情報をSyncする
 - 顧客からの取得(GET)系をAWS内で完結させる
- 実行したいクエリ・ユースケースに応じて、利用するDBを選択

Tips: UIの表示系を、契約に応じて制御する

- 3つの方法
 - Stripe APIから都度取得する
 - 実装の手間は少ない
 - HTTPSリクエストが出るので、少し時間がかかる
 - o Stripe Webhook経由で、CognitoのUser Metadataにもたせる
 - Amplify SDKでクライアント側からデータが取れる
 - リスト系データの保存が難しい
 - Stripe Webhook経由で、ユーザーDBにもたせる
 - 柔軟性はもつとも高い

AWS AmplifyとStripeでフロントエンドを効率的に開発

- Stripeを使って、**サブスクリプションの契約管理**ができる
 - ただし契約系以外のUIはStripeのみで提供できない
- AWS Amplifyを使えば、サービスのUIから認証系、UI Component、
 アクセス管理にCI / CDとSaaSのフロントに必要なものが揃う
- セキュリティのために、Stripeのサーバー側APIキーはSecrets Storeへ
- StripeのCustomerとCognito Userの紐付け方法は、 アプリ・サービスの状況や要件に応じて決定しよう

今日のトピック

- AWS AmplifyとStripeを利用して、 SaaSやECのフロントエンド開発をスムーズにできる
- 決済やサブスクリプションなど、 顧客・契約の状態と連動したWFも、Amazon EventBridgeでスムーズに
- AWS AppSync・AWS Step Functionsを活用して、
 決済・サブスクに関する運用効率化(決済OPS)をはじめよう

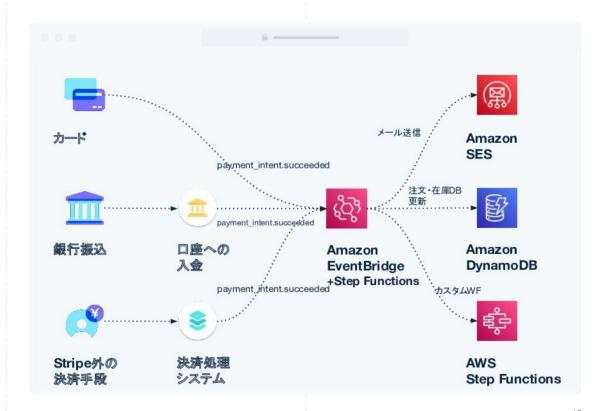
なぜイベント駆動にするのか

同期的に処理できないことに 対応する**システム**を作るため

- ・銀行振込・コンビニ決済
- サブスクの契約更新
- ・未払いの検知・入金確認

顧客やシステムの「状態」を「イベント」として システムに通知する仕組み

Stripeでは、**150種類以上**の Webhookイベントをサポート



システムもサブスクリプションも、「運用」が大切

- サブスクリプションは、「契約し続けてもらう」必要がある
 - 使わないサブスクサービスは、解約される
 - **競合他社への乗り換え:**「もっと安いor便利なサービスにしよう」
 - 需要の消失:「子どもが成長したので、もう使わない」
- システムも、「動き続けてもらう」必要がある
 - 環境の変化で、「変更してないコード」も**時に動かなくなる**
 - SaaSやAWSのAPI仕様変更
 - OS・ランタイム・ライブラリの更新や統廃合

EventBridgeなどのメッセージサービスに、状態を集約

- StripeのイベントやAWSリソースのイベントを投入する
 - EventBridgeは「どのイベントを待ち受けるか」で設定できる
 - ただし強い速達性やスケールを求める場合は、 SNSやSQSが向いているケースもある
- 「この状態になったら」「このワークフローを実行する」で設計
 - 例: 決済に失敗したら、EC2インスタンスを停止する
 - 例: CloudFormationの立ち上げに失敗したら、顧客に返金する

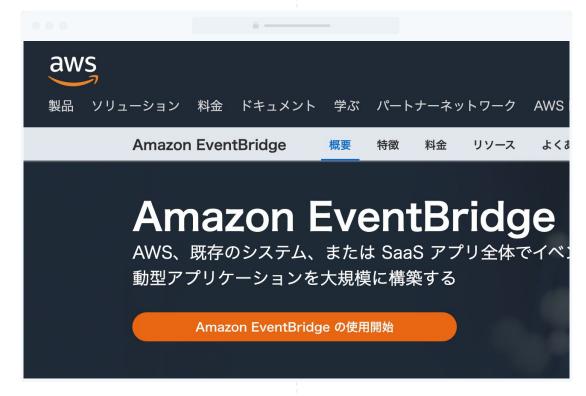
Amazon EventBridgeでWebhook連携を効率化

StripeのWebhook APIは、 署名検証などの実装が必要

Amazon EventBridgeの クイックスタートで、 Webhookの受信部分を CloudFormationから セットアップできる

Stripe -> AWS連携を 実質ノーコードで実現

https://aws.amazon.com/jp/about-aws/whats-new/2022/08/amazon-eventbridge-supports-receiving-events-github-stripe-twilio-using-webhooks/



Stripeのイベントから「契約・顧客の状態」を知る

Stripe Webhookのイベントは リソースの詳細情報が見れる

JSONで構造化(ネスト)した データがくるので、 Stripe API Docsを参照に 読み解く必要がある

読み解くと、 EventBridgeのフィルターで 複雑な条件検索が可能になる

```
"version": "0",
"id": "123-456-789",
"detail-type": "invoice.updated",
"source": "stripe.com",
"account": "0123456789",
"time": "2022-09-07T06:23:31Z",
"region": "us-east-1",
"resources": [],
"detail": {
    "id": "evt xxxxxxxxxxx",
    "object": "event",
    "api_version": "2020-08-27",
    "created": 1662531810,
    "data": {
        "object": {
            "id": "in xxxxxxxxxx",
            "object": "invoice",
            "account country": "JP",
            "account name": "テストアカウント",
```

EventBridgeでのフィルターの例

クイックスタート利用の場合

Sourceでstripe.comを指定

detail-typeで Stripeのリソース名を指定

detailで、JSON構造に対応した 条件を書くと、絞り込み

右の例:

「5000円以上の請求書」に関する全てのイベント

```
"source": [{
  "prefix": "stripe.com"
}],
"detail-type": [{
  "prefix": "invoice"
}],
"detail": {
  "data": {
    "object": {
      "total": [{
        "numeric": [">", 5000]
      }]
```

EventBridgeに「状態」を集約し、システムの起点にする

- AWS内のAPIイベントや、StripeのイベントをEventBridgeへ
- 顧客・契約・システムの状態と、その状態に対する処理を EventBridgeのルールとして明示的に定義
 - CDKやCloudFormationで、コード管理も可能
- 「XXの場面では、この作業を」という「運用タスク(OPS)」を、 手続き・処理として整理して、AWSで自動化・効率化しよう

今日のトピック

- AWS AmplifyとStripeを利用して、 SaaSやECのフロントエンド開発をスムーズにできる
- 決済やサブスクリプションなど、 顧客・契約の状態と連動したWFも、Amazon EventBridgeでスムーズに
- AWS AppSync・AWS Step Functionsを活用して、
 決済・サブスクに関する運用効率化(決済OPS)をはじめよう

変化した「状態」をどう処理するか?

- EventBridgeで、「この状態になったら、処理を起動」は定義できる
- 「どのような処理を、どの順番で実行するか?」
 - 複数のデータを、繰り返し処理する。
 - 失敗した時の、リカバリーや返金フロー
 - 別のリソースが「特定の状態」になることを待機する

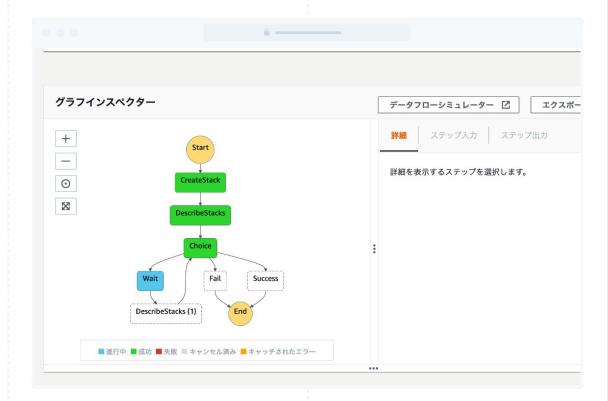
AWS StepFunctionsで、手続き処理をローコードに

ワークフローを設計・実行

AWSのAPI呼び出しが可能ローコードにWFが作れる

ChoiceやWaitで、 条件分岐や待機も可能

- 失敗したら、10秒後にリトライ
- •3回失敗したら、 キャンセルして返金



Stripe + Step Functionsで、簡易WPホスティングWS

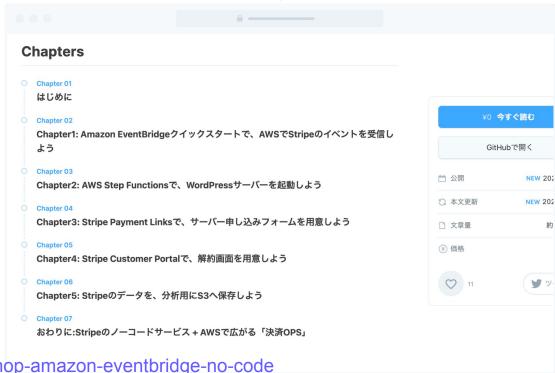
10月に開催したAWS連携WS

Stripe Webhookで サブスク契約完了を通知

EventBridge -> StepFunctions

StepFunctionsから、 CloudFormationを起動

同様の仕組みで、 解約時のリソース削除も対応



25

https://zenn.dev/stripe/books/workshop-amazon-eventbridge-no-code

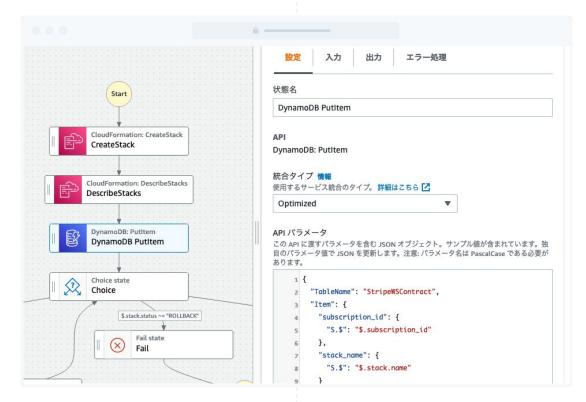
ワークフローはGUIで設定可能

Workflow Studio

ドラッグ&ドロップで 処理ステップの編集が可能

AWS API呼び出しの引数は APIパラメータから設定

入力/出力タブで、 ステップに渡すデータの 編集や指定が可能



Workflow Studioで作って、JSONで共有・管理する

ステートマシンをJSONに

GUIで設計して、 完成したらJSONを取得

CDKやCloudFormation化で 完成したWFのコード管理も

コード管理の現場でも、 設計はWorkflow Studioで 効率化することが可能

```
"Comment": "A description of my state machine",
"StartAt": "CreateStack",
"States": {
 "CreateStack": {
   "Type": "Task",
   "Parameters": {
     "StackName.$": "States.Format('LAMP-{}', $.detail.created)",
     "TemplateURL": "https://s3-external-1.amazonaws.com/cloudformation-templates-
     "Parameters": [
         "ParameterKey": "KeyName",
         "ParameterValue": "for-stripe-workshop"
         "ParameterKey": "DBName",
          "ParameterValue": "MyDatabase"
```

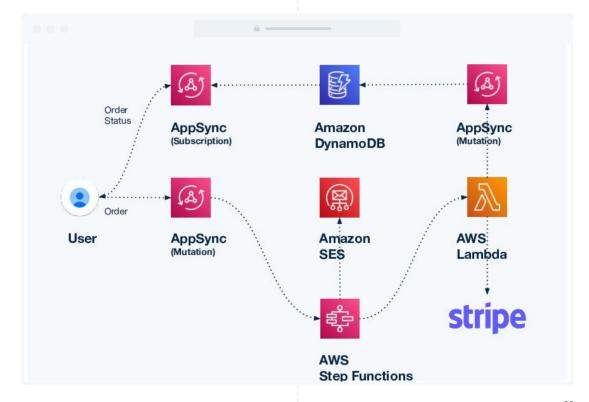
ユーザーとのコミュニケーションにAppSync

イベント駆動では、 ユーザーが「今の状態」を 把握しにくい

APIポーリングでも可能

AppSyncの Mutation / Subscriptionで 状態変化をLiveに通知できる

MutationはLambdaまたは EventBridge API Destinationで



EventBridgeで、外部APIを呼び出す (API Destination)

日本語名: API送信先

EventBridgeのルールで、 外部APIを呼び出せる

入力トランスフォーマーで リクエストBodyのJSON定義も

エラーハンドルや データ処理を加えたい場合は 引き続きLambdaを用意しよう



Webhookで、ユーザーとの関係を構築しよう

- システムもサブスクリプションも、 リリースor契約からが本番
- それぞれのWebhookイベントで、
 「システム上で何が起きたか」「契約が今どうなっているか」を
 システムや人間が簡単に把握・対処できるようになる
- SaaSのAPI / Webhookからの情報を収集して、 QuickSightなどを使ったビジネス分析も

うまくいった施策・システムを 横に展開 or SaaS化する

Stripe Appsで、自動化・効率化の「横展開」

- Webhookを利用した「仕組み化」に成功すると、成功施策の横展開やパッケージ化が可能になることも
- Stripe Appsで、StripeとWebhookの処理システムとの連携や配布が簡単に
 - 必要なもの
 - Webhookを処理するAPIシステム(AWSで構築)
 - React + TypeScript + 専用UI FWでダッシュボードウィジェット

Stripe Appsの例: RPAツールとStripeで顧客データ連携





決済システム / 決済OPSからはじめるDX

- 守りの決済と攻めの決済
 - 守りの決済: 顧客が正しく・ストレスなく決済できる環境づくり
 - 決済・請求システムの安定稼働
 - 金額や取引内容の正確性
 - 不正利用の予防やスムーズな対処
 - 攻めの決済: 顧客がよりお得に、便利にサービスを利用できる仕組み
 - 契約期間・利用累計額に応じた優待や提案
 - 従量課金プランや休会など、ユースケースにあった**プランの企画**
 - 決済データを元にしたレコメンドや在庫予測

決済システム / 決済OPSからはじめるDX

- AWSのマネージドサービスとSaaSで、 システムの**安定稼働や正確さ**などの「守り」を固めよう
- EventBridge / Webhookを活用した「状態の把握」で、顧客や契約、システムに応じた柔軟な「攻めの運用」を目指そう
- イベント駆動で疎結合なシステムとして構築し、Stripe Appsなどで「成功したシステム」をas a Service化しよう